

第3部 パネルディスカッション

コーディネーター

石阪 督規さん

東京未来大学准教授

パネリスト(50音順)

安藤 大作さん

三重県PTA連合会 会長

佐々木 光明さん

神戸学院大学法学部 教授

中野 和代さん

津市教育委員会 教育長

鈴木 英敬

三重県知事

石阪: みなさん、こんにちは。東京未来大学の石阪と申します。私は、3月まで三重大学にいましたので、三重県の条例や白書を近くで見させていただきました。非常に素晴らしいものだと思っておりますが、何よりも素晴らしいのは、今日子どもたちですね。すごいですね。みなさんが子どもだったときにはできましたか？人前に出て行って、皆で発表するというのは、多分相当大変だったと思います。お疲れさまでした。

ただ、大人からちょっと弁解しておきます。大人ってものすごく、「忙しい」と言います。忙しい先生、忙しい親、忙しい大人たちは、忙しさのあまりどうしても、子どもたちをぞんざいに扱ってしまうことがあるんですね。本当は皆さんのことは大事なんですよ。だけど、よく大人たちは「忙しい」という言い訳をたくさん使います。実際に、昔と比べると働く時間がどんどん長くなっています。そうして、大人たちはストレスを抱えてしまい、ストレス社会にいますと、どうしてもその行き場のない怒りや感情を、近くにいる人に向けてしまうことがあります。大人たちは、ストレス社会の中で一所懸命頑張って子育てとお仕事に取り組んでいます。そういう中で、今、一所懸命子どもと向き合おうとするために、今回こういうイベントを開いているんですね。

昔は、生まれが場合によっては差別や格差につながるがあったんですが、今、三重

県でやろうとしていることは、みなさんは楽しく堂々と生きる権利があって、どの家に生まれても、どの家庭の親に育てられても、地域や県、みんなが一体になって協力して、みなさんを支えますよ、という宣言なんです。だから、今日いらっしゃっている大人のみなさんはもちろん、これからは条例というさっきの文書にもあったとおり、みんなでみなさんを支援しますよ、これが今日この場で披露されることです。

今日はこれからディスカッションをするわけですが、子どもと実際にかかわりのある方々をお招きしていますから、はじめに感想をいただこうと思います。さっきのこども会議の発表について、どう思われたのか。それから、これから三重県ではどんなことが大切なのか、それぞれの立場からお話を伺いたいと思います。

中野: 今日の小学生・中学生・高校生の発表、素晴らしいかったですね。こんなに大人がいる前で、いかに堂々と自分の意見が言えたかというのは、本当に三重の子どもたちはすごいなと思いました。私は実は高校の教員を長くしてしまっていて、その後この職につきました。その間、娘2人を育ててきた母親でもあるんですが、みなさんの、気持ちのいい、すかつとする大人への提言、本当に楽しく聞かせていただきました。これは帰って先生方にしっかり伝えなければいけないなと。「雑に話をま

とめないでください。」そやなあって思います。授業参観では本当に後ろのお母さんたちのほうがうるさいですね。「先生、叱ればいいのに」ってやっぱり思っていたんですね。この場で、はっきりびしっと言ってくれた。これはすごいなと思います。高校生の話は、本当にまるで昔の私に向けられているような提言だったと思います。つい「高校生らしくしなさい」とか「そんなことしたら就職できませんよ、大学の推薦ができませんよ」と言っていたような気がします。ごもつとです。やはり、つい私たちが考えている「粹」というものに、みなさんをはめてしまう、何かそういうイメージを持って、皆さんに対してしまう、というのがやっぱり大人なのかなあと。特に、教育をする立場となると、ちょっとでも有利にちょっとでも評価が高くなるようにと考えるとついつい粹にはめてしまうところがあるんだなと、つくづく今日は感じさせていただきました。今日の皆さんの非常にはっきりしたほがらかな楽しい提言をぜひこれから持ち帰って、学校現場の先生がたにも伝えていきたいなと、そんな感想をもちました。

安藤：今日の小学生・中学生・高校生の発表それぞれに至るまでのこども会議の進行をコーディネートさせていただきました。何回か集まりを9月・10月に持って、子どもたちが本当に思っていることを聞いて、そして、今日に至ったわけです。発表したお子さんは自分の保護者の方に言いたいわけではなく、一般論として聞いていただければと思います。しかし、リハーサルもしましたけれども、今日の本番を聞いて、やっぱり涙が出ました。子どもの声が一番響きます。一方的にボコボコにされたような心地よさがあります。普段はどうしても大人から子どもたちに一方的に「ああしなさい」と言うことが多いかもしれませんが。我が家でもそうです。子どもといえば「わがまま」。わがままといえば「子ども」かもわかりません。でもひょっとすると大人・親のほうがわがままなのかもしれない。自分の思うがままにならないと気が済まないことを「わがまま」であるとして、もし子

ども大人も両方ともわがままで子どもだというときに、どちらが先に大人にならなければならないかということ、やっぱり親が襟を正して大人にならないかんのかなと思います。じゃあ、親はどうやって大人になるのか。大人って、大人に言われてもなかなか劇的には変わりにくい。頭でっかちで、頭では理解しても、なかなか心までには入ってこなかったりしますけれども、やっぱり子どもの声なら心に届いてくることがあります。愛する子どもたちの声は地上の星です。ですから、親はやっぱり子どもによって気付かされて、親は子どもによって大人にしてもらえるのだと思いました。

今回発表したみんなと出会わせてもらって、本当に皆さんいい子でした。素直に自分の気持ちを語ってくれました。今日は、要望や不満ばかり言っていたように聞こえるかもしれませんが、もちろん彼ら彼女らは、ご両親にも先生方にも感謝しています。そのうえで、彼ら彼女らの純粋な心の中に、くすぶらせている気持ちを今日は語ってくれたんじゃないかと思います。それは、大人から見たら、子どものわがままに聞こえることもあるかもしれませんが、わがままかどうか、正しいのか正しくないのかは別として、それがあくまでも純粋な子どもたちの気持ちなんだと感じました。

親がこれから子どもたちと向き合って話をしていくことで、もし子どもたちの言っていることが単なる誤解であったなら、子どもたちが納得するまで話し込めばいい。もし大人や親が悪かったことなら、大人といえども、子どもに謝ればいいし、そうやって大人の態度で、子どもたちのくすぶる気持ちを溶かすことができるのかなと思いました。自己肯定感という話が冒頭からありましたけれども、ただ褒めたらいいんや、話を聞けばいいんやということで終わらせるのではなくて、子どもから学ぶという姿勢とか、子どもによって親は大人にしてもらえるという謙虚さを親が持って、親自身が学べば、大人と子どもの自己肯定感につながるんじゃないかと思いました。子どもの声は本当に涙腺をゆるませま

す。響きました。ありがとうございました。

鈴木：子どもたちの発表、本当にありがとうございました。来てくれてどうもありがとう。さっき、安藤さんから「一般論ですから」というふうに言うてもらったんですが、多分みなさんは、私もそうですけど、子どもが今日言うてくれたことを聞いて、「せやな、せやな、ほんまにせやわ」と思ったと思うんですね。でもそれが他人の子から言われたら「せやな、せやな」と思うのに、自分の子から言われたら、「何をこら！」と思うかもしれない。もし自分の子どもから言われても、「せやな、せやな」と思った同じ心で接してもらえたらいいと思うし、僕もそうしないかなと思いました。

それから、子どもたちが言うてくれたことなかで、最初は自分の夢を応援してくれるのに、年齢が上がっていくにしたがって、現実を押し付けて応援してくれなくなるという言葉がありました。私が以前、ある北海道の電気会社の社長さんに言われたのは、すべての子どもが可能性を持っていることは誰もが信じて疑わないことなんです、「そんな無理やで。できへんで。」と言う大人が結構いる。そういう子どもの可能性をつぶすのは、殺人をしているのと一緒だと。子どもたちの、これから伸びていこうとする可能性、命、を奪うのと一緒だというふうに、ある北海道の社長さんが言うてくれていたのを思い出しました。子ども自身もそういう思いなんだな、これから一所懸命頑張っていく、相当頑張らないと手が届かないかもしれないけれど、これからやっていこうと思っているのに、「そんな無理やに、やめとき。」とか言う大人がいる。応援してくれない大人がいることに、子どもたちも寂しく思っているだろうし、三重県ではそうはありたくないというふうに改めて思いました。

自分の家族のことを言うのもなんですけれども、うちの妻はシンクロナイズドスイミングをずっと、小学校のときからやっていたんですけど、お母さんに、7・8歳のときから、「金メダル取りたい」と言っていたら

いです。それを、お母さんは「そんな無理」とは一切言わずに、「ええやんか。取ったらええやんか。その代わりめちゃうちゃ頑張らないといかん。」というふうに言っていたらしいですね。それで今日の子どもたちの声を聞いて、そういう可能性をつぶすんじゃなくて、いくら年齢が上がっていったとして、相当努力しないと手が届かないようなことがあっても、やっぱり応援してあげることが大切なんじゃないかなと。家族が応援してやらないなら、誰が応援してくれるんですか。先生が応援してやらないなら、誰が応援してくれるんですか。そう思いました。

石阪：ちょっと子どもたちに聞いてみたいんだけど、早く大人になりたい？それとも子どものままでいたい？どっちがいいか、ちょっと手を挙げてもらっていい？早く大人になりたいか、今の子どものままでいたいか。どっちか手を挙げてね。早く大人になりたい？はい、おお。子どものままでいたい！っていう人は？ああ、いますね。はい、結構高校生も手を挙げていますね。

これもね、一つ問題だと思うんですね。昔は早く大人になりたい、という人が結構多かったんです。早く自分で責任を持って、自分でちゃんと稼いで、しっかりと生活していきたい。ところが今、小学校の現場に行くと、子どものままでいたいという人が結構多いんですね。今大人の状況が悲惨でしょう。非正規雇用の問題もそうだし、投資をやってもうまくいかない、景気もあまり良くならない、そういうなかで、あんな大人になって苦労するくらいだったら、ずっと子どものまま楽しくサッカーをやっているほうがいいや、と思う子どもたちが増えているという結果があるんですね。つまり、今の子どもにとって、我々大人はあまりうらやましくないという状況です。いつのころからか、大人がちょっとしょぼく来てきたというか、あんまりロールモデルにならなくなってきたんじゃないか。その背景には、大人があまり笑顔がない。楽しそうに仕事をしていないとか。何となく大人がつまらなそうにしている。これを子どもが見

ているんですね。大人って面白そうじゃない、先行き暗い話ばかりじゃないかと。

だから、ある意味、白書の内容やこども会議の発表は、大人に対して「もっと輝けよ、何やっているんだ、お前ら」という子どもたちのメッセージだと思っています。そうすると、自戒の意味も込めて、大人って何なのか、何をしなければいけないのか、自分たちの問題になってくるんですね。そういう意味で、今日のこのフォーラムは、大人たちが何をすべきなのか、これを考えるためのフォーラムだと思っています。さきほどの佐々木先生のお話も非常に勉強になりました。先生、さきほどの子どもたちの意見をきいてどう思われましたか。

佐々木：子どもたちの声を聞いて、チクリと胸が痛いところがたくさんありました。あの発表のために、きっと仲間たちで盛んに議論したんだろうなど。あれをまとめていくプロセスはどんなふうだったんだろうと気になりますね。その様子を間近に見てみたいなと思いました。さきほど後ろを振り返りながら、「大変だった？」と聞いたら、「けっこう大変だった」と。でもにこやかに答えていて、きっと議論のプロセスは楽しかったんだろうなという気がしました。

さっき、知事は巻物を受け取っていましたよね。みんな、返事欲しいよね？

実は私も子育ての最中のときに、保育園で自分の子どもたちが保育さんにむかって、「私たちもっと抱っこしてほしい」ということを言っていた場面があったんですね。一つの意見表明だったんだと思います。

国際連合には子どもの権利条約の委員会があって、国際的な場で子どもの権利条約をチェックしている場がありますが、そこに子どもが行って、今のように意見を言ったりします。「国連で何をしていますか」と見学に来て、その場で、「私たち子どもにもっと分かるように言って。」と言っているんですね。その意見表明をすると、みんな「返事聞かせて」って待っているんです。だから、子どもたちは今日きっと、大人に向けたメッセージを、

何らかの形で、知事の返事を待ってくれるのかなと。

鈴木：わかりました。僕も返事を書きますけれども、ぜひ、今日来ていただいているみなさんにもアンケートに絶対書いてください。子どもたちの発表を受けて、自分はこう思ったよという返事を書いていただいて、それを編集して子どもたちに返します。

石阪：いいですね。ぜひみなさんにもご協力を。

鈴木：みなさん、絶対書いて下さいよ、一言でもいいから、書いてもらって、それを編集して子どもたちに返します。

石阪：そういう意味では今日のシンポジウムも、答えの一環だと。子どもからメッセージをいただいて、意見がこちらに来たわけですから、大人としてどういうことをやっていけばいいのか、どんなことが必要なのか、それぞれのお立場から今度は伺っていきたく思います。

中野さん、津市教育長というお立場で、いろいろなことを進められていると思いますが、何かユニークな事例とか、子どもを育てるための支援などがあれば教えていただけますか。

中野：はい、津市の小中学校で取り組んでいることをご紹介します。今、津市の小中学校では、「地域とともに作る学校づくり」というのを、それぞれの学校でやっておりまして、それぞれの学校が地域の人たちに、学校に対してこんな応援をしてください、というようなお願いをしています。例えば書道の時間に、公民館で勉強しているおばあちゃんたちに来ていただいて、墨の擦り方とか、毛筆の使い方などをご指導していただいたりとかしています。それから、よくあるのは、近くの田んぼをお借りして、田植えをして稲を育てて、収穫をして、餅つきをして、近所の人たちをお招きして収穫祭をする。そんな取組を2、3年取り組んでいます。ずいぶ

ん学校の様子が変わってきたような気がするんです。学校にいろんな人が来てくれるようになった。地域でも登下校なんかも近所の方達、とくにお年寄りの方達が、時間を決めて、角に立ってくれていて、「おはよう」って声をかけてくれたり、帰りには「おかえり」って出迎えてくれたりというような光景も地域に広がってきているように思えます。

実は全国学力学習状況調査で、三重県は下から数えて何番目なんて言われていて、キックオフの宣言もしたんですけど、津市は、その調査のなかにある子どもたちの回答と、学校がどんなことをしていますという学校の回答とをクロス集計しまして、地域の人たちと一緒に活動しているような学校の子どもたちは、どんなふうに変わってきているか、というのをちょっと調べてみたんです。そうしたら、本当にうれしい、やった甲斐があったかなというような結果が出た学校がちらほらとあります。

例えば、地域の方をお招きして、お店をやってみえる方や会社をやってみえる方たちに、どういう思いで会社を運営しているのかというお話をさせていただくような授業をしている学校の子どもたちのクロス集計を見ますと、やっぱり、「人の役に立つ人間になりたい」という結果が、平成 21 年の結果よりも、平成 24 年の結果のほうがずっと上がっているんですね。ほかに、いろんな人が学校へボランティアで活動に入っていたりしているような学校の集計結果を見ますと、「自分には良いところがある」といういわゆる自己肯定感が、21 年に比べて 24 年のほうがずっと上がっているんですね。ある中学校では、授業のサポートに大学生などが入ってくれている学校もあるんですが、その子どもたちの調査結果では、平成 21 年と 24 年を比べますと、家で学校の宿題をしているかとか、家の手伝いをしていますかとか、新聞やテレビのニュースなどに関心がありますかとかの質問が、全部右肩上がりに上がっていますね。やっぱりいろんな方が学校にかかわっていただいている、子どもたちがいろんな年代の人、いろんな仕事をしている人、いろんな思いの人にかかわ

ることで、自分が大事なあとか、もっと役に立つ人間になりたいなとか、もっと勉強せなあかんとか、気持ちが自然に伸びてきているという結果が出ましてね、これはやってきた甲斐があるなと思います。もっとこういうのが広がるといいなと、そういう形で子どもたちの応援がしていけたらなと思います。

石阪：かつての学校というのは、先生にお預けするという感じでしたが、もう「学校に預けておけばいい」という時代ではないんですね。地域の方が学校に入って行って、先生と一緒にいるようなプログラムに参加する。実際にデータを見ると、そういう学校のほうがあきらかに右肩あがりになって伸びているということなんですね。つまり、いろんな人と交わることで、その人の可能性や肯定感というものが上がっていくということが実際に検証されているということです。我々も単に、「これは学校、これは家」というふうではなくて、では地域の中で一体どんなことができるんだろうとか、子どもたちをからめて一体何ができるのかと。特にこれからは、65 歳以上の高齢者がどんどん増えていく。会社をリタイアしてセカンドステージに入っていくときに、そういう方たちが子どもたちに関わって一緒に取組をする。すごく重要だと思います。地域力を高め、学校がかなり変わっていくんですね。子どもたちも、「あ、こんな面白いことがあるんだ。地域にこんなものがあるんだ。」とそういう体験が変わっていくんじゃないかと思います。また、今まで親や先生が抱えていた問題やプレッシャーをみんなでも共有して、そのプレッシャーを下げていってあげる取組にもなるのかなと。子育てって一人でやるんじゃないんだ、みんなで作るんだよと。

安藤さんは、親と子の問題について関わっておられましたけれども、親として、子どもとどう向き合えばいいのか、わからないと思っている方もいらっしゃるかもしれません。親としてどうすればいいのでしょうか。

安藤：私は、片付けがとても苦手な人で、書類と

かもぐちゃぐちゃにカバンの中に突っ込んでいたりします。でも子どものランドセルはお父さんみたになってほしくないと思って、「片付けせえ、片付けせえ」と言います。でも残念ながら子どももあんまり片付けが得意ではありません。多分「お父さん片付けてないのに」と思っているかもしれません。あるときは大声あげて、「下に服が置いてあったらもう捨てるからな」と言って本当にゴミ箱に捨てたこともあります。でも結局また同じことが繰り返されます。

僕はある日、息子に「お父さんも、片付けがものすごく苦手なんだけど」と正直に言いました。息子は「知っとる。だからお父さんに言われても何とも思わない。」と言いました。「それはお父さんも悪かったと思ってる。言い過ぎた、ごめん。でも、お前がお父さんみたいになると、いろいろ苦労するかなと思って言うとなのや。お父さんも出来てないけど、お前にはやってほしいから言うとなのや。」「ほんなら、お父さんも一緒に頑張ろや」と言われました。「僕もお父さんが片付いていないときは言うから」ああ、そうなるんやなあと思いましたが「ほな、そうしょか」と言いました。

実は私も家庭のなかで甘えていました。私は核家族の父親なんで、ときどき「オレがルールや」みたいな感じで威張っていましたが、子どもと約束したこともあって、考えながらやってきました。それから子どもも少しはその部分においては良くなったかなと思います。

親というものには、子どもにこうなってほしいという愛があります。でも、こうなってほしいというのが時々自分にとって都合のいい、ただの要求になるようなこともあるかもしれません。

もし親が子どもにAであってほしいと思っても、本当は子どもはBでありたいと思っているときに、しっかり話をしていないと、子どもは親が怖かったりして、お父さんの前ではAにあわせているかもしれません。親の前では「片付けします」と言っているけど心の中では「誰がするか」と思っておったとし

たら。親と自分との間の心に影が差して裏と表ができる。そうすると子どもは元気がなくなっていく。過度の要求なのか、愛で言っているのか線引きは難しいのですが、子どもが、私の言葉を子どものための言葉として聞いてくれているなら、愛として聞いているかもしれない。もし「お父さんの都合で言うだけやんか」と子どもが聞いていたら、過度の要求、親のわがままと受けとっているかもしれない。そうすると心の陰ができて、元気がなくなり、元気がなくなるから学業もスポーツもにぶってきて、いろんなことにやる気がなくなっていくのかもしれない。

今回こども会議をコーディネートしていて、とても印象に残っていることがあります。あるこども会議のときに、「今から僕が言う3択で、一番元気がなくなるときに手をあげて」と言いました。「1番は、自分がめっちゃめっちゃ叱られたとき。2番は、お父さんでもお母さんでも、家族の誰かが目の前でめちゃくちゃケンカしているとき。3番は、陰で家族が家族の悪口を言うとき。」目をつぶってうつぶせにして手を挙げてもらったら、3番の悪口のときに、一番手が多く挙がりました。それが今日の発表にもなっていたんですが、夫婦げんかとか、家族のケンカとか、自分がめちゃくちゃに叱られるというのは、それは向き合っている一つの形、日なただと思うんですが、悪口っていうのは、見えないところでやっている陰だと。そういった陰と出くわすと、子どもは元気がなくなるんかなと思います。それでは陰を日なたにする方法はどうすればいいかという、これは面と向かって本音で言うことだと思います。だから今日子どもたちは目の前でどーんと言いました。三重県には小中学生だけでも14万人いますから、それぞれの子どもたちがそれぞれのところで、向き合って、本音で語り合うことをしたらいいんじゃないかなと思います。でも子どものなかには、「うちの親に言ってもどうせ無駄や」とか「聞いてくれへん」とか、やってもいらないからそう言う子どももいると思います。でもそれは、子どもの勇気不足です。子どもも勇気出したらいいと思います。子どもが本

音でしゃべったら大人は聞くとします。そして大人も「うちの子に言っても無駄や」とか言うのは、親の粘り不足、謙虚不足かもわかりません。

結局、私は今回すごく思ったのは、親やけど悪かったら謝ろうと思いました。それから自分の弱さを含め、子どもにさらけだして、一緒に努力しようと思いました。子どもも親に、本当の思いを、間違っていたいなくても、勇気を出して言えばいいと思いました。それで大人も親も初めて気付ける。自分の子どものことを愛しているから、痛いけど子どもの声は聞けるとします。そういう関係ができるといいと思います。私は親として、そういったことに努めていきたいなと思いました。

石阪：最近ではペットブームで、従順で鳴かない、うるさくないペットが人気だそうです。なんだか子どもをペットと勘違いする人がいるそうですね。親の言うことを全部聞いてくれる、文句を言わない子が良い子。でも子どもはペットじゃないんですよ。安藤さんの話は、ぶつかってもいいよ、という話でした。今までは「口答えするな！」って言う言い方がありますね。「オレが親なんだから。誰が飯食わしてやってるんだ。」みたいに、子どもが親に対して何も物を言えない、そんな時代がありました。けれど、これだとさっき言ったような二重生活ですね。親の前では良い面を見せて、陰で悪いことをする。結局のところ問題が水面下に行ってしまうと、より複雑になっている。それだったらきちっと向き合って、場合によってはケンカするぐらいの自分の主張をするぐらいのことをしていかないと難しいのかなと。ただ、それは簡単ではないですよ？親として悪いところは反省する。今までの親の威厳とかメンツとかをある程度捨てるぐらいの姿勢が必要なかもしれない。「間違っていた、ごめん」あるいは、何か言ってきたときに、「じゃあ、一緒に考えていこうじゃないか」と、「言うは易し」ですが、とにかく一つ一つ実践してみるということが必要ですね。感情にものを言わせて、というの

が一番まずいのかな。そのあたりのことが今後の課題になるのかなという気がします。知事は、親子の問題を含めてどう考えますか？

鈴木：そうですね、本音で向きあうということをお安藤さんが言ってくれたことは難しいかもしれないけれども、そこがコアだと思うので、それは努力しないといけないと思いますし、行政である三重県としては、親と子の関係はさることながら、子どもが育っていくこと、子どもの育ちを応援することが、自分事なんだと、他人事じゃなくて自分事だと思う大人を増やす、そんな大人をつなぐ、そういう取組を特に力を入れてやっています。例えば企業との関係では、みえ次世代育成応援ネットワークがあって今1,073の会社や団体の人たちが、いろんなイベントや、子育てに頑張っている親御さんたちを応援しています。あとは「みえの子育ちサポーター」が今2,181人いるんですけど、その人たちは親を応援したり、子育てを頑張っている人たちをサポートしたりします。親やあるいは子育てを応援することが自分事だと思う大人を一人でも増やして、それをつなぐ、ということが行政の仕事として今やらせてもらっています。

石阪：今の県の取組、いわゆる次世代を担う子どもたちと色々な形で関わる。企業であったり、男性だったり、今まであまり子どもと関わりがなかった人たちを、子育てサポーターという形で育成して行って、地域や家庭の中でどういう子どもと向き合いかたが良いのかを考えてもらえる。これを一人でも多くの方に登録をしていただいて、自分は子どもと改めて向き合いたい、これは父親でなくてもいいんです、おじいちゃん・おばあちゃんでもいいわけですね。誰でも基本的にそういうかたちで関わるということが必要なのです。佐々木先生に聞きますが、いかがでしょうか、いままでのみなさんのお話をきいて。

佐々木：大人と子どもが関わることといえば、昨日仕事から帰ってテレビを見たら、「ホームアローン」という映画をやっていました。ク

クリスマスの家族旅行にとり残された8歳の子どもが、一人で泥棒から家を守るコメディタッチの痛快な映画ですが、そこで、印象的場面がありました。

教会で頑固者みたいなおじいちゃんと子どもがいるんですね。おじいちゃんが「教会ってというのは心に面倒をかかえたときに来るところだ、お前は何かあったのか」、「おじいちゃんこそ何かあったの?」とやりとりするんですね。子どもは、「実は僕は家族が大好きなのに、そんなことが言えなかった。」と言うと、おじいちゃんは、「逆に反対のことを言ってしまう。そんなことがあるんだ。」と言います。子どもが「おじいちゃんはどうなの?」と聞くと、「実は息子がいて、聖歌隊で歌っているのは孫娘だ。でも歌う場面に来れない。息子とはケンカしてるんだ。あるときずっとケンカしたまま口もきいていない。」と。子どもが言うんですね、「どうするの。」「そんな息子に謝ったりするのが怖い。」そしたら、「言ってみればいいじゃない。息子に自分の思っている気持ちを言えればいいじゃない。そうしなきゃ次が始まらないよ。」子どもがおじいちゃんに向かって、問題があって次に進むには言ってみなきゃと言う、そんなシーンがあって、安藤さんのお話を伺いながら、がちり向き合ってみようということがとても大切だと思いました。親が子どもに話せないというのはけっこう怖いんですね。映画のおじいちゃんじゃないけれども、息子に拒絶されて孫娘に会えなかったらどうしようと、怖いし、自分が「許さない」なんて言ったらどうしようかと。ちょっと怖いところを、ちょっと踏み越えて、聞いてみたら、話してみたら、という、踏み出しの、最初のきっかけってやっぱり大事だなと思いました。その大事な踏み出すきっかけを大人が一人で作るのは大変なので、何かのときにそんなきっかけを作っていく。結構まわりの状況を話せるきっかけを作っていくということはとても大事という気がします。条例の中で、行政の役割としてとても大事だなと思いました。

石阪：親だけで抱え込むんじゃなくて、行政

であったり地域の人であったり、いろんなしくみをつくっていったほうが、いいでしょうね。同じ悩みを抱える人同士が共有できる場ですよね。それが、「うちの子は大丈夫だ、ずっと良い子できたから、何の問題もない」というのが実は危ないのかもしれない。本当は一度くらいはぶつかったほうが良いのかもしれない。「良い子」っていうのは、表面上は良い子のふりをしているだけかもしれない。反抗期、反抗することって実は良かったのかもしれない。やっぱり違う世代間では衝突するし、摩擦もでてくる。お互いを理解しあえる仲になって本当の信頼ができてくるのかもしれない。安直にそれを省略して、形だけの仲のいい家族をつくらうとしても、なかなかうまくはいかないわけですね。

今大きな問題のひとつとして、子どもたちに元気がない、下向いて覇気がない。昔と比べてやんちゃな子がいないですね。ちょっと教師に反抗するような子はむしろ少なく、おとなしい、良い子が多い。一見良さそうなんですけど、反面、今問題になっている自己肯定感が低い、自分はいしたことがないという子どもが増えている背景には、やっぱり何か自信がない、自分がどうしたらいいのかわからない、そういう問題があるんだと思います。今日の一つのテーマである、この自己肯定感を高めるために、何をすべきかということで、中野さん、さきほど地域での取組の話がありましたけれども、この自己肯定感を高めるために親としてどんなことをしていけばいいのでしょうか。

中野：やっぱり子どもは、親が自分のことをじっくり見てほしいと思っていますけれども、親子っているのはなかなか面とむかって話をするってということがないです。自分の子育てを振り返ってもそう思うんですね。自分の娘が5年生のときに、ミニバスをやっていたんですけど、朝練に出掛けていったんです。その後、私はちょうどゴミを出しに行きましたらね、娘がとぼとぼと歩いて行くんです。そしてその5、6メートル先を先輩らが歩いていくんですね。追っかけていくのかな

あとと思ったんですが、その距離がいつまでたっても縮まらないで、ずっと見てますとね、後からとぼとぼ付いていくんですね。それで、ふっと気付きました、私は娘が元気にミニバスに行っていると思い込んでいたんです。それで帰ってきた娘に、「ミニバス、やめてもいいよ」って言ったんですね。そしたら娘の顔がぱっと明るくなって、「お母さん、ほんとにいいの？」って訊くんです。そのとき、はっと思いました。娘は娘で、自分は元気にミニバスを一所懸命やっている良い子の振りをしなくっちゃと思っていたのかな。いやでいやで仕方なかったんだけど、お母さんに「やめたい」ってずっと言えなかったんですね。それで自分は反省しました。本当に忙しい毎日、高校に勤めて帰りが遅かったものですから、娘はよう言わなかったんだらうなど。それに、自分自身、うちの娘に限って、うちの娘やったら絶対大丈夫だという思いがどっかにあったのかなど。やっぱりお互いが話しをして「ああ、あなたはそう思っていたんか、そうやったんか」という話をするなかで、「あ、やっぱりお母さんは私をちゃんと見ててくれた」とかね。

これは教師と子どもたちとの間もそうだと思います。どこかで「あ、きみはそう思ってたんか」という話し込みがあれば通じ合うことができる。それが自己肯定感につながると思うんですね。ですから今、学校でそれぞれお願いしているのは、その聞き役を地域の方にもぜひ一役担ってほしい。いろんな活動をするなかで、いろんな地域の方がいろんな役割を果たしていただくなかで、ちょっと声をかけていただくことで、子どもたちが「おじちゃん、また学校に来てね。」「おじちゃん、おはよう」って、そうやって声をかけあうことで、子ども自身が、自分はここの学校に通って楽しいんやと、ここの地域で育ててもらってうれしいんやという気持ちが自然にわいてくるんじゃないかなと、そんな気持ちを持っています。

石阪：地域と子どもの関わりが、だんだん希薄になっていて、子ども会の加入率がどんど

ん下がっている。そのうえ地域での見守りは、限られた地域でしかできていないところがあるので、むしろ地域の方々が子どもを守っている、子どもを育てているというのはうれしいですよ。おじいちゃん、おばあちゃんから声をかけられる。特に小学生なんかは元気に登校していきますので、こんなことができたらいいですね。安藤さん、自己肯定感は難しい問題ですが、どうすればいいでしょうか。

安藤：やっぱり私は、子どもの自己肯定感の根本は、親の愛だと思います。ひとこと言え、自分の子どもがおぎゃあと生まれてきたときの、あのころの気持ちに戻って、無条件にその子を愛すること。でも親も、生まれたときから親をしているわけではありませんから、無条件の愛というものをしっかりと出していくためには、ひょっとしたら親自身が自分の親に向き合わないといけないのかもわかりませんね。

重い話かもしれませんが、親である自分にも歴史があって、親がいて、いろんなことがあって、その中で過去においてやり残したことや、もっとこうあってほしかったこととか、愛されたかったけど愛されていなかったんじゃないとか、すねてしまっていることとかあったとしたら、そういったもので今ぼっかりと空いたところをなんとか埋めていくのに、家族に甘えたりわがまま言ったりして、子どもにその矢が飛んでいったときに、子どもは自己肯定感を失ってしまったりするかわからない。となると、親は、親といっても一人の人間だし、生まれたときから大人でも親でもないの、もう一度自分自身のあり方を、自分の親と向き合って話をし合うということが、とてもしんどいかもかもしれませんが、親が親として成長していくためにも大切なことかなと思います。そういったことって普段は考えないでしょうけど、ひょっとしたら自分の親とも向き合っていくことも大事なのかなと考えるきっかけとなる、成長させてもらう。我が子がいるからそんなきっかけをもらえるという謙虚な気持ち、ありがたいなと思う気持ちをもって、子どもの問題も自分事と

して、考えることが親として大事なのかなと思います。そういう親の姿勢を見たら、子どもは納得して、「お父さん頑張ってる、お母さん頑張ってる」って言うかもしれない。「お前たちのおかげでそういうことに気付けたよ」と思えば、おぎゃあと生まれたときのあの日の気持ちと無条件の愛、そこに行けば、自己肯定感っていうのは実は当たり前のことなのかなというふうに思います。やっぱり子どもたちの自己肯定感、親である自分自身の自己肯定感であると思います。そういうことが未来の地域を肯定していくことにもなるんだと思います。自分の心が晴れば、子ども心も晴れて、未来も晴れていくんじゃないかなと思うと、子どもたちのことをきっかけに、自分も、自分のまわりにいたたくさんのやさしさとか、周りのいろんなものに気付いて、それから子どもたちに接していく、ということが大事なんじゃないかと、子どもたちの純粋な声だからこそ気付きました。そういうことを心がけることが大事じゃないかなと思います。

石阪：子どもの自己肯定感があがらないというのは親の問題だということでもあるんですね。僕の子どもは幼稚園に行っています。男の子なんですけど、何になりたいかときくと、「将来は仮面ライダー」と言います。一番尊敬しているのは仮面ライダーですから、僕は仮面ライダーになろうと思いました。僕は子どもの前では仮面ライダーなんです。今日は、三重県で200人の怪人と戦っていることになっています。家では、カッコいいお父さんになろうと思った。息子は「うちのパパはね変身してね、怪人をやっつけているんだ、」と周りに吹聴しています。僕がずっと格好つけて生きようと決めたのは、親が常ににこにこ笑いながら、「今日の怪人は強くて足を負傷したけれども、左足で蹴って」とか言って、カッコいい親であると、子どもと一緒に笑える瞬間ってあるんですよね。やっぱり親が暗かったり、ふさぎこんでいたり、笑顔がなかったりすると、「お父さんどうしたんだろう。」と子どもは不安になる。だから僕は極力笑顔で

カッコいい父親をめざそうとしています。妻には、わけわからないことを何やっているんだと飽きられています。でもそれでいいと思います。そんなお父さんと一緒になって笑えるでしょう。だけどいつの頃からか、嫌われるんだろうね。娘からは、パンツと一緒に洗いたくないといろんなことを言われるんですが、だけどそれを承知のうえで頑張りたい。さあ知事ですが、自己肯定感について。

鈴木：子どもが自己肯定感を持てるようになるために、大人ができることですね。僕も最初に思ったのは、さっき安藤さんが言った、大人自身が自己肯定感を持つこと、子どもたちが大人のことを良く見ているということが分かりましたから、自己肯定感を持つ大人を見れば、「ああこういうふうにしたらいいなだね」と分かると思うし、よく昔から、「他人と過去は変えられないけれども、自分と未来は変えられる」というじゃないですか。ということは、子どもたちにこうあってほしいな、という前に、まず自分が変わればいいんですよ。大人が自己肯定感を持つということ。

あとは、日本の一億総中流みたいな島国で生活していると、みんなと一緒にないといけなとか、正解を探しちゃうんですよ。算数の問題みたいに何でも正解を出すっていうことにこだわりすぎたりするといけなんじゃないかと思います。さっき、佐々木先生の話のなかでも、どうしたらいいんですかと言ってくる親のことをおっしゃっていましたが、子どもがやりたいと思っていることや、子どもがこう育っていこうとしていることに対して、唯一の正解にあてはめようってしないほうがいいんじゃないでしょうか。私よりも先輩の方が多いので、当たり前のようにご存じだと思いますけれど、社会に出たら正解じゃないことだらけですよ。社会ってそういうことかなと思うので、子どもたちの人生に唯一の正解を求めすぎない。正解を大人が勝手に作ってそれを子どもにはめ込まない、ということじゃないかと思います。

石阪：そうですね。算数ならいいですけど、

ある程度の年齢になったら、単に一つの正解やマル・バツじゃなくて、いろんなグレーのものもあれば、逆に正解を自分で作っていくような機会をつくってあげて、家庭でも学校でも、自分でいろいろと臨機応変に対応できる能力をつけていけるように。

これから社会を担う子どもたちに求められるものは、おそらく激変と呼ばれる時代に対応できるような力です。そんな大人をどうやって作っていくのか。子どもたちがこれからの社会を背負って立つわけです。今までと同じやり方をさせるとか、こうしろああしろと言っているだけで、本当にこの日本を支えきれぬのかどうか。少ない若者の人数でどうやって最大幸福を生み出すのか、そのためにはどんなことが必要なのか、ある意味でオールジャパンで考えていくようなしくみをつくっていかないといけない。そういう意味では、今回の白書フォーラムも、こうやってみんなが参画することによって、子育てどうしよう、これからの未来どうしようと考えることがすごく良い機会だと思います。

鈴木：石阪先生が「カッコいい大人に」と言っていました、こういうイベントでいつも大人のみなさんをお願いすることがあって、またかってまた思う人がいらっしやるかもしれないけれども、「疲れた禁止令」です。大人は子どもの前で、「疲れた」と言うのを禁止。家に帰ってきたら、ドアの前で一呼吸おいて、「ああ疲れた」ってそこでは言ってもいいけど、ドアを開けたら、「今日も一日めっちゃ仕事楽しかったあ！」と。お母さんたちも、「今日の家事、めっちゃ楽しかったあ！めっちゃめっちゃできたあ！」とね、疲れた禁止令。

石阪：そうなんですよね、親が疲れて、やる気がない顔をしていると、子どもはやっぱり不安に思ってしまう。すごい元気だと、逆に子どもはうんざりしちゃうかもしれないけれど、それぐらいのほうが、むしろ家庭はうまくいくのかもしれないです。さて、最後にみなさんにメッセージをいただければと思います。

佐々木：自己肯定感は話題になっていますけれども、正直私はよくわからなかったんですね。でも自分のことを考えてみると、例えば私の友人が、ほかの人に私のことを「あの人がすごくいい人だね」とか言われるとやっぱり嬉しいし、自分のやっていることに対して、ちょっとでも興味をもってもらえると嬉しくなるんですね。きっと子どもも同じかなと思って、やっぱり、子どもの何かを育てるっていうことは、まるごと受けとめて、友達のこと、自分がやっていることを含めて、そこに近寄っていくことをすると、やっぱり嬉しくなるのは、元気の出発点かなと思っています。「少し聞いてみたら、話してみたら」とそうやって近づくきっかけを作ってみるのも大事な事かなと思いました。

白書を見ると、子どもが相談する相手はダントツにお父さんが低いです。友達と母親に相談するのが多くて、やっぱりいつもそばにいてさまざまな自分のことを知っているからなんですね。お父さんっていうのは子どもから見ると遠いところにいる、さっきの石阪先生の話じゃないけど、忙しくて、社会や会社を背負って、子どもにとってはなかなか近づきにくい存在ということなんでしょう。その意味で、大人問題の典型はやっぱりお父さんたちかなという気がします。

カッコいい父親というのは私も共感しています。私は情けない父親で「疲れた」とかさまざまに言ってきた親父でしたし、子どもは娘2人で、パンツを一緒に洗ってほしくないとか、うるさいなあとか、邪魔にされているクチですけども、かつて、情けない親父にも一つだけ、子どもが寄ってくる瞬間がありました。寝るときにいつも本を読みきかせしてしまして、だんだん疲れてくると私は勝手に自分で物語を作って話していたんです。そのときは、情けない父親が「次聞かせて」という話の続きを握っている大きな存在になりました。頑張ってみようと思うんですが、やっぱり情けない父親で、子どもよりも先に寝てしまうっていう、どうにも続かないっていうことだったんですけども。でも

子どもに近寄っていくことは、決して父親に難しいことじゃない。何か子どもがやっていることを見つけて、少し近づいていく、怖くないから近づいてみよう。お父さんたちを励ましたいという気がします。

中野：こういう話し合いができるっていうのは、たぶん子どもたちが勇気をもって、呼びかけに参加してくれて、本当にいろんな意見交換をしてくれたそのおかげかなと思っています。子どもたちからは、大人に対してずいぶん厳しいいろんなご指摘があって、なるほどなあと一つ一つ胸に来るものがありましたけど、ここには現れていませんが、どの子どもたちも親にすごく気遣いをもって毎日接してくれているような気がします。それは自分が長年、教師という仕事のなかで、親子の姿をいろんな場面に接したときに、子どもは決して口には出しませんが、「お母さんに心配かけちゃいかん。お父さんに心配かけちゃいかん。私はここでふんばらないかん。」というのを、どこかで「あ、この子、親に気使っているわ」と思うことがあったんです。それが逆に親子ということかなあと思いました。時々その思いを担任や親しい先生にぶつけてきても「絶対お母さんには言わないで」と言ったり。だからその子どもの気遣いから、子どもの居場所はその家にちゃんとあるんだなといつも思いました。やっぱり家庭もそうですし、長く子どもたちが育つ学校というところも、子どもたちの居場所であってほしい。「今日も学校に行ってこよ。」と子どもが心を許しておれるような学校を作っていないかなあと、今日はこれに参加してつくづく思いました。

安藤：親である自分は、もちろん完全無欠の人間ではありません。なので、こういうことで気付きを得て自分を整える、自分の半径3mをきちんと整えることで、家族が整う。もし世の中の家族がたくさん整えば、世の中も整っていくんじゃないかと思えますから、まずは自己肯定感、自分を整えること。自分の自己肯定感もしっかり上げていくというよう

なことを思いました。

そしてやっぱり褒めるということですね。そのことの大切さは大人もわかっていますけれども、本音を言うと、大人である自分たちも褒めてほしいんじゃないかなと思います。でもなかなか大人が褒めてもらう機会はありません。大人同士が褒め合うしくみがこれから大切になってくるんじゃないかなと思いました。

最後に、9月8日に中学生のこども会議をやって、一週間後の9月15日に高校生のこども会議をしました。それから10月14日に小学生のこども会議をしました。知らない子たちばかりがぱっと集まった。最初はなかなか堅かったです。けれど、だんだん仲良くなって、一緒にお昼ご飯を食べて友達作って、お互いがぱーっと言い合いをして、そして今日の巻物になりました。そのとき以来、今日12月1日を迎えるまで、もうすぐやもうすぐやと思っておったと思います。昨日の夜も、いよいよ明日や、明日は言えるかなあ、大丈夫かなあと思っておったと思います。せやけど、とても立派でした。感激しました。子どもたちは参加することにも勇気がいったと思いますし、ここで発表するにも勇気がいったと思います。立派でした。お疲れさまでした。ありがとうございました。

鈴木：まず、今日は本当に土曜日にもかかわらず、この会場を埋め尽くすたくさんの方にご参加いただいたことに感謝申し上げたいと思います。それから、この日にむかって9月から準備してくれて、今日立派に発表してくれた子どもたちにも感謝申し上げたいと思います。ありがとうございました。

うちには6ヶ月の息子がいます。子育ての先輩のみなさんからは「そんな甘いもんと違うで」と言われるかもしれませんが、昨日息子が離乳食のハウレンソウをつぶしたやつをたくさん食べれるようになったんですね。それまでは、びえ～、びえ～っと全部流しておったんですけども、昨日はお皿につくったやつを全部食べれるようになって、妻も僕もめちゃうちゃ嬉しかったわけです。そういう

一つ一つの小さな「できた」が喜びなんです
が、誰でもそうだったと思いますね。だから、
子どもたちの年齢が上がるのが、だんだん見
えにくくなっていくかもしれないけど、子ど
もの一つ一つの「できた」を喜びあうこと、
それをよく見てあげること、一緒になって心
から喜んであげる、っていうのが大切なんじ
ゃないかなと思います。今自分が6ヶ月の息
子と向き合っていてそう思いました。

あと三重県は、今年の1月に、幸福実感調
査というのをさせていただいて、そのなかで
幸福感を判断するとき、もっとも重視する
ことは何ですか？とお聞きしました。全国
の調査では、自分の健康状況が自分の幸福感
のなかで大切やと答えたんなんですけど、三
重県は、家族って答えたんなんです。めちゃ
くちゃ嬉しいと思います。つまり、三重県
民は、幸せを判断するとき一番大切なこと
は家族だと。そしてその家族の真ん中には
子どもがいる。ということは、子どもを大
切にすると、家族は楽しい、幸せ感もあ
がる、ということですから、三重県が幸
せでいっぱいになるためにも、みんな
で家族の真ん中にいる子どもたちを大事
にするのが大切なんじゃないかと思いま
した。

今日は僕もたくさん学ばせていただきました。
今日の最後には、ぜひ皆さんにアンケート
にご協力いただいて、子どもたちにお返
事をお願いしたいと思います。後ろに、子
どもたちが言ってくれたことをパネルに
貼りましたので、忘れてしまった方はそ
れを見ていただいて、一言でも結構で
すから、子どもたちに返事を書いてい
ただければと思います。今日はありが
うございました。

石阪：ありがとうございます。さて、みな
さんいろんな話がありました。我々大人も、
当然昔は子どもでした。僕も初めての子
育てにずっと関わってきて、初めてのこ
とばかりで分からないことだらけです、
ですから大人なんてかっこいいことを
言っておきながら、実は試行錯誤しな
がら一所懸命大人をやっているん
です。だから大人たちも真剣に子ども
たちに向き合おうとしている。そうい
うなか

で、これからはじゃあ大人も子どもも腹
をわって話そうよと、そのために三重
県が舞台を用意してくれて、こういった
環境もどんどん整備していきますよと、
そのためのスタートだと思ってくださ
い。そう考えてみると、みなさんも今
までだったら、例えば居場所がなかな
かなかなかったとか、相談どこに行
たらいいかわからない、親となかなか
うまくいかない、そういった問題を
一人でかかえていたかもしれないけ
れど、ここにいるみなさんがそれこそ
協力者です。相談してみてください。
先生も、親も、まわりにいる人たち
みんなが、みなさんの将来の成長を
楽しみにしています。

さて、ご来場のみなさん、今日の
ディスカッションは課題出しという
段階です。子育てにおそらく正解は
ないと思います。解答はそれぞれの
子どもによって違います。地域性も
ある。そういうなかで、今日の話を
きっかけに、それぞれの地域や家
庭や学校の中で、新たな子育ての
しくみをみんなで考えていける、
そういう場をこれからご自宅に
持ち帰って、また検討していただ
ければと思います。そのための
きっかけというフォーラムだ
と思います。以上をもちまして、
パネルディスカッションを終了
させていただきます。長い間
になりましたが、どうもありが
うございました。

